

「旧いアルバム」より～

『現寸（原寸）場』

設計図を基もとに、溶接に伴う収縮などを事前に考慮した上で製作部材の正確な寸法出しを行うことを「げんすん」と呼ぶ。当社では長らく建築鉄骨では「現寸」の漢字を用い、橋梁では「原寸」の漢字を用いてきた。過去の社史や社報では両方の漢字が混用されており、当社史ではここまで、各々の習わしを尊重して漢字の使い分けを行ってきた。

昔の社寺建築では縮小図面のみならず実物大の設計図も使ったとされ、これを「現寸」と呼んだことが、この漢字を使い始めた起源と思われる。宮大工を務めた清水喜助を初代とする清水建設でも「現寸」を使っており、当社においてもこれを継承した。

しかしながら蒲田跨線橋や福島高架橋などを契機に主要事業の一つとなった橋梁の分野では、一般的な用字用語でもあった「原寸」の漢字が使われており、当社の橋梁担当もこれになった。

悩ましいのは全社的な共有施設である「げんすんば」をどう表記するかである。過去の社史に記された取手工場の配置図にその名残があり、56年史では「現寸場」、70年史では「原寸場」と記されている。この移り変わりは、鉄骨・橋梁それぞれの売上比率の変化を表すもので、言わば時代の主役によって使い分けられた感もある。（「東京鐵骨橋梁「百年史」より）



1930年代 芝浦工場 現寸場



1962年(昭和37年) 芝浦工場 現寸場



1991年(平成3年) 取手工場 現寸場
-横浜ランドマークタワーの原寸検査-